

第十二章

セクシュアリティ

——「性のアナーキー」の時代に——

中田 元子



「女性の権利、つまり好きな方を」『ジュディ』（1869年3月31日号）

第一節 知性とセクシュアリティ

「性のアナキー」(Letters 5: 113)——ギッシングが生み出したこの言葉は、現在ショウォールターの著作の題名としてよく知られている。ショウォールターによれば、性のアナキーの時代とは「性のあり方と営みを支配していたすべての掟がこわれたようにみえる時期」であり、余計者の女たち、新しい女たちの出現とともに始まった(Shawlette 59)。そのような女性たちのなかには、高度な教育を受け、従来男性の領域とされた領域に進出することを求める者も出てきた。既得権を脅かされつつあると感じた男性たちは「科学的根拠」をもって猛反発した。知的活動は女性の生殖機能に悪影響を与えるというのである。この主張の元祖ともいえるハーバート・スペンサーは「女性には過度の知的労働によって、完全に不妊になったり、不妊傾向に陥ったりする」と警告し、「厳しい勉強をくぐり抜けた赤ちゃんこの胸の娘たちは子どもに授乳できなくなる」(Spencer 29)と脅している。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの法医学教授だったヘンリー・モーズリーは「精神と教育における性差」(一八七四年)において、「身体に男女の区別があるように、精神にもはっきりした性別がある。したがって、精神がその本来の資質によって可能な最良の教養を得るためには、性別に応じた精神の特質を考慮しなければならない」と主

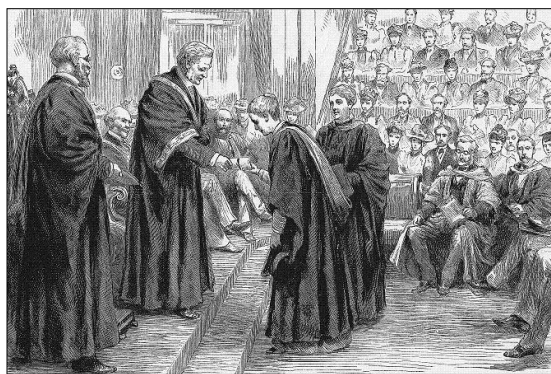
張し、さらに、女性に長期にわたって精神的作業を続けさせると「虚弱で病気がちになり……結婚しても母親としての機能を十分に発揮できない身体になる」(Maudsley 475)と述べる。モーズリーにとって、J・S・ミルの「現在女性の本性と呼ばれているものは際立って人為的なものである」という主張などは、身体的な男女差がある以上論外なのである(208)。

女子高等教育については世紀末に至るまで反対が唱えられ続けた。一八九八年『ガールズ・オウン・ペーパー』に掲載された「ロンドン大学学位授与式」という記事のなかで、「女子卒業生」と名乗る筆者は、女性が高度の学問をすることに對しては依然として根強い反対があることに触れている。

勉強しすぎが娘たちに与える弊害については耳にタコができるほど聞きます。……女たちが知識の追求に一生懸命になりすぎると嘆く殿方が数多くおられます。そんなことに身を入れてみると、若さや目の輝き、美しさを早くになくしてしまうと予言なさいます(図①)。

しかしそのような反対にもかかわらず現実には進展していった。女子高等教育反対の旗頭モーズリーが教授を務めていたロンドン大学は、一八七八年、女性に對するすべての差別を撤廃し、その結果、一八九一年までに同大学で学士号を取得した女性の数は四百二十二人になった。

「性のアナーキー」という言葉の生みの親ギッシングは、一八九三年六月二日付エドゥアルト・ベルツ宛ての手紙で、女性の知的向上を求めている。「私が女性の〈平等〉を求めるのは、とにかく女が男と同程度の教育を受けて知的にならないかぎり、世の中に平和は訪れないと確信しているからです。人生の不幸の大半は、女の無知と幼稚さが原因なのです」(Letters 5:113)と書き、女性に対する教育を強く求める。たとえそのことによって、多くの人にとって「性のアナーキー」とみえる時期が到来したとしても、その段階を通過しなければ、男女が真に幸福になることはできないとギッシングは考えたのである。また、「イギリスの解放された女性たちのなかには立派な人がたくさんいます。彼女たちは、女性と



図① 「麗しき女子卒業生」『グラフィック』(1891年5月23日号)

しての美点を全く失わず、しかも啓発される過程、つまり知力開発の過程を通して、知性の面で(また道徳の面でさえ)多くのものを得ているのです」(5:113)と述べ、女性に対する高等教育を全面的に支持している。これは実際にイライザ・オームやクレアラ・コレットといった高等教育を受けた女性たちと親しく付き合ったうえで得た確信であろう。

さらにギッシングは、女性のなかでもとりわけ労働者階級の女性を知的に向上させることへの強い希望を表明する。同じ手紙の後半で、「労働者階級の女性が今のブルジョアなみの分別を持つようになつてくれれば満足です——そうなれば確かにかなりの進歩ということになるでしょう」(Letters 5:114)と述べ、ブルジョア女性がすでにある程度の知的段階まで達しているのにひきかえ、労働者階級女性の知性が物足りないとの認識を持っていたことを示している。ミドル・クラスに属するギッシングがなぜわざわざとりたてて労働者階級女性の知性を問題にしたのだらうか。それは、ギッシングが自分の結婚相手としては労働者階級の女性しかいないと考えていたことに原因があると推測される。ギッシングは二度目の結婚相手となるイーディス・アンダーウッドと出会う前の月に、ベルツに宛てて「上の階級の女性と結婚できる望みは現実的には全然ありません。全くないのです!」(Letters 5:116)と書いている。なぜそこまで確信を持っていたかと言えば、同じ階級の娘との結婚を望んだところで、「教育のある英国娘は、わざわざ貧乏をすることが分か

っていて結婚はしない」(225)と書いているように、自分の収入はミドル・クラス女性が十分と思うほどではないだろうと考えていたこと、前科者であることなどの理由が考えられるが、そのほかに、ミドル・クラスの女性に自分の性的欲望を満たしてもらうことは望めないと考えていたこともあるのではないだろうか。

ヴィクトリア時代、女性には性欲を持たないものとされていた。ウィリアム・アクトンの「多くの女性はいかなる類いの性的な感覚にもあまり煩わされない」という言葉は余りにも有名である。女性のなかでも特にミドル・クラスの女性はその道徳性を称賛されるにあたつて、男性と違って性的欲望に悩まされず純潔であることがひとつの根拠となっていた。ミドル・クラスの女性が性交渉を苦痛の種と考えているという報告もなされていた。アクトンは、性交渉の結果起こる妊娠・出産によって、身体の不自由、苦しみを味わうことを思うと、もう夫と性交渉を持ちたくない、と打ち明けた女性の話を引用したり、逆に妻がそのような状態に陥ってしまい悩んでいる男性たちについて言及している(Acton, *Functions* 166)。また、夫婦間であつても性交渉は週一回にとどめておいたほうがよいと勧めてもいる(246)。ギッシングは、スランプ時の日記に「結婚するまでもう決していい仕事はできない」(Dian 226)と書いたこともあるように、創作の不調を性行為によってまぎらわそうとするこ

といるなか、欲求不満解消のための性交渉を妻に、とりわけミドル・クラスの妻に求めることはできないと、ギッシングは考えていたのではないだろうか。

アクトンが女性には性欲がないと言った時、そこには労働者階級の女性も含まれていた。アクトンは女性が売春婦になる理由を考察するなかで「自身の制御しがたい性的欲望のせいでは女性が道を踏み外すことはほとんどない」と述べている。しかし労働者階級には放縦、墮落、汚染などといった性格が付与されていた影響で、その階級に属する女性も同様の性格を持ち、したがって性的にもたがが緩いと考えられていた。実際には労働者階級の女性のあいだでも性についての知識、行動には差があったが、ミドル・クラスが労働者階級の女性たちについて抱いていたイメージは、婚前交渉を当然のように行ない、売春婦を生み出す、性的に放縦な女たちというものだった。^⑩『余計者の女たち』(一八九三年)で、女性のための職業訓練学校を経営するメアリ・バーフットは、「労働者階級の娘の唾棄すべき欠点は……動物的本能を満たすことだけに夢中になっていることだ」(第六章)と述べ、労働者階級の女性が性的欲望に弱いと考えられていたことを示している。

とはいっても、メアリは女性の性欲の存在自体を否定しているわけではない。ミドル・クラスの女性は、教育と属する階級の気風によってその存在を前面に出さずに済ませることができ、そこが労働者階級の女性と違う点だというのである。ここで注

目すべきなのは、アクトンによって否定された女性の性欲の存在が認められていることである。ハヴロック・エリスが、女性にも性欲がある、と指摘したのは二十世紀になってからのことである。¹¹ ギッシングは、女性の性のあり方についての先入観を覆すような見方を表明していると言ってよいだろう。

そのようなギッシングが自分の結婚相手としては労働者階級の女性しか対象として考えられなかったのはなぜだろうか。ミドル・クラス女性が性欲をもつセクシュアルな存在であることが認識されているのであれば、すでに知的にある程度解放されているミドル・クラスの女性こそ理想的な伴侶の候補となつたのではないだろうか。しかし、性欲があることは自覚していても、メアリが言うように、それを慎み深く隠しておくことが女性の取るべき態度であると考えられていれば、そのような態度を装う女性に対しては、男性も礼儀上性欲を持たないものとして対応せざるをえなかっただろう。ギッシングは、女性のうちに知性とセクシュアリティの共存を求めたが、何よりもまず自分の性的欲望を満たすことを優先させたため、慎重深さの規範を前提とするミドル・クラス女性は選択の対象外になつたことが推測される。

第二節 男であることの困難

アクトンは、女性には性欲がないとする一方で、「健康で節

制を守っている男性の性的欲望は非常に強い」(Acton, *Functions* 二〇と述べた。そして、その欲望は動物が持っているのと同じ本能ではあるが、自然に任せたままにしておく健康を害すと警告した(二〇五)。ヴィクトリア時代のミドル・クラス男性は、性的欲望に関して、自然なものではあっても、その発揮を抑制しなければならぬという二律背反に直面したのである。

ギッシングは一八九〇年九月十六日の日記に「ときどき狂人になつたような気がする。結婚するまでもう決しいい仕事はできない」(二二〇)と書いた。執筆が不調で精神的に追い詰められていた時、必要なのは女だった。この欲求を満たすために行動したギッシングは、八日後、オックスフォード・ミュージック・ホール(図②)でイーディスと出会う。そして、そ



図② 1890年代のオックスフォード・ミュージック・ホール

れから二週間も経たないうちに妹エレンに手紙を書いて、「年末に結婚するかもしれないと知らせた」（『実際には翌年二月に結婚、*Diary* 227）。後にガブリエル・フルリに認めたところによれば、ギッシングはその時「欲求不満の極みに達して絶望的になっており、恐ろしいほどの性的欲求に苦しめられていた」（Halperin 136）。第一節でみたように、同じ階級の娘が自分を結婚相手と考えてくれるわけではないと悲観してもいた。こうしてギッシングは、労働者階級出身の、全く知的ではない女と、孤独——とりわけ肉体的孤独——を慰めるために結婚した。結婚という形態は、何よりも肉体的欲望を継続的に満足させる見通しを与えてくれるという点において望ましいものと、少なくともその時には考えられたのである。

欲望を抑制することが規範とされる集団に属しながら、欲望を抑えきれず性急な行動をした結果もたらされる不幸な出来事の一例が『渦』（一八九七年）でセシル・モーフェウの経験として描かれている。セシルにはヘンリエッタという婚約者がいたものの、婚約者の両親から結婚するに十分な収入があるとは認められず、永すぎた春を過ごしていた。その間に起こったある出来事が婚約者に知れて婚約を破棄されるのだが、その破談通告を受けたあと、ハーヴェイ・ロルフに事情を説明するなかでセシルは言う。

「ヘンリエッタの事でひどく惨めな思いをさせられていたこと

をご存知ですよ。ぼくはほとんど発狂寸前だった。あの、あれをどう言ったらいいんだろう。あの年頃の男が経験する苦しみ表現するちゃんとした言葉がなぜないんだろう。もうどうしてもひとりではいられなかった——限界だったんです」

（第三部第七章）

セシルはそうのように追いつめられた状況のもと、公園で出会った労働者階級の娘と関係を持ち、子どもができたと告げられる。セシルは「自分は善良な女性の愛には値しない」（第二部第七章）と、自身が下劣な男であることは認めつつも、他の女と関係を持つような事態になったことの責任の一端は婚約者にもあると考える。「娘たちは、一年また一年と男を待たせておきながら、自分たちがどういうことをしているのかわかっていない」（第三部第七章）と、女が男のセクシュアリティについて無知であることを責める。とはいっても、セシルはただ女だけを責めて済むものではないことも承知している。なぜなら男の性欲のことを「だれも説明してやれない」（第三部第七章）のだから。つまり、女の無知はヴィクトリア時代のお上品ぶりが奨励した無知である以上、女だけの責任を問うわけにはいかないということである。セシルの苦しみは、社会が一致団結して産み出した構造的苦悩ということになり、セシルの背後には、同じ苦しみをかちもつ無数の男たちがいるのである。

男性の欲望の制御にくさは、ハーヴェイをして、男の子は

いっそのこと幼いうちに死んでしまったほうが幸せだと言わせるほどである。ハーヴェイは、セシルが関係を持った女が産んだ子が、結局一、二ヶ月で飢え死にしたと聞いても、「それが一番だったよ、きつと」(第三部第七章)と慰める。長じて性の苦しみを味わうことがなくて済んでよかったと考えたからである。ハーヴェイは三歳の自分の息子についても、「ヒューイは黄金時代のまっただなかにいる。あと一、二年もすれば人生最良の時は終わる。今はもう幼児でもなく、かといってまだ少年でもないが、それに比べると、少年期は鉛のように重苦しい時期なのだ。そして男になると――性の苦しみが始まる」(第三部第一章)と言ひ、だから、子ども時代の幸福と無垢を永久に失って大人になるよりは、遊んでいる間に眠りに落ち、二度と目覚めないほうが息子にとつて望ましいのだと考える(第三部第六章)。あまりにも皮肉で悲観的な見方のように思われるが、子ども時代に人生を終えることの幸福をハーヴェイは半ば本気で信じているようだ。

男の性欲が生きる上で非常に厄介なものであることをあからさまに表現している点で、ギッシングは表面を取り繕うヴィクトリア時代に一種の「性のアナーキー」状態を作り出していると言える。さらには、男であることの困難が、部分的には女の無理解によつて生じていること、また女をそのような状態に与えている社会にも責任があることを指摘した点も、旧弊な規範から見れば眉をひそめられることだっただろう。

第三節 母親のセクシュアリティ

さて、結婚は男性にとつて確実に性的欲望を満たすことができる方法と言えるが、それはまた社会公認の再生産システムでもある。第一節で見たように、女性に対して男なみの教育を与えることに反対していた医師たちは、女性が知的活動をすぎると再生産活動が不調になる、すなわち女性としてのセクシュアリティを十分に発揮できなくなると警告していた。つまり母親になるということはセクシュアリティを最大限に発揮する活動なのである。しかし、妊娠・出産という母親になるための行為、またそれに引き続く授乳という行為はふつうセクシュアリティの発揮とは認識されない。母親はもっぱら精神的に慈しみ育てる存在として理想化され、セクシュアリティという要素を脱色される。

『渦』ではアルマの妊娠は次のようにほめかされる。ハーヴェイが、妻アルマの様子がおかしいと言うのに対して、アルマの義理の母であるミセス・フロシנגラムが控え目に微笑みながら「何でもないのよ」(第二部第一章)と言うこと、これだけがアルマの妊娠を示している。その後、妊娠中のアルマ本人が登場することはなく、妊娠中の経過については伝聞の形でさえ伝えられることはない。そして出産に至るが、それは「相当危険なものだった」(第二部第一章)と語られるものの、これも具

体的にその様子が描写されることはない。また、アルマが二度目の妊娠をしていたことが読者にわかるのは、山道で乱暴に馬車を走らせたあと倒れたアルマを診察した医師が「明快な診断」(第二部第三章)を下したという一節を読んで、それが流産を意味していると解釈できた時である。この流産のあと、アルマはもう一度妊娠する。この時にはアルマ本人がハーヴェイに「身体の不調の当然の説明」(第三部第四章)をしたと表現される。一方、『余計者の女たち』でモニカの妊娠がほめかされるのは、駅の待合室で気分が悪くなったモニカを介抱してくれた婦人たちの言葉が「心もとなげで注意深く曖昧なものだったが、モニカには思い当たったことだろう」(第二十三章)というそれ自体曖昧な表現によってである。

これらの婉曲表現が示しているのは、再生産自体は社会から推奨された行為だったとはいえ、妊娠に関しては、その語自体も含めて表現することは注意深く避けられていたということである。ヴィクトリア時代において、母親であることは価値のあることであっても、母親になる行為は触れるべからざるものであった。この点において、ギッシングは時代の慎み深さを共有しているといえるだろう。

次に、出産に引き続いて行なわれる授乳という行為について考えてみよう。十九世紀末には人工哺育がある程度安全なものになってはいたが、医師はつねに母親による授乳を推奨した。医師たちは、授乳は「絶対的な義務」であると声高に命じ、授

乳しない母親は獣にも劣ると非難した。エドマンド・コートリ―は「乳児哺育」(一八九七年)で、「健康な母親であっても、授乳を拒否することによって、子どもを病気にしたり死に至らしめる原因を作り出す」と書いて、授乳しない母親に脅しをかけている。そして「完璧な母親」となるための条件を、身体全般にわたる健康状態、乳房と乳首の状態、精神状態、生活様式、年齢、妊娠に備えた準備、食事、運動、全般的な衛生、乳房と乳首の手入れなどに分けて十頁にわたって細かく記している(Cutler, 1997)。ここで母親の乳房はまるで子どもを養い育てる機能に特化した機械のように扱われ、いかなる意味のセクシユアリティも持ち合わせないものになっている。

ハヴロック・エリスは授乳時の性的な快感について述べた母親もいると報告している¹⁴⁾。しかし、母親となった女が示すことを許されるセクシユアリティは、母乳を分泌するという母親としてのセクシユアリティのみであり、しかもそれはセクシユアリティの発露と意識されてはならない。授乳という行為から性的な意味合いは一切排除され、代わりにそれはもっぱら母性愛の表れとみなされる。たとえば、『渦』におけるハーヴェイの友人バジル・モートンの妻は、自分の存在意義は家族のために尽くすことにこそあると考え、自分の都合、楽しみのことなどは全く頭をかすめない女性であり、その「乳房は命の泉で、赤ん坊はそこにくっついて大きくなった」(第三部第一章)と表現されている。母親の乳房が理想の母親の象徴とされているので

ある(図③)。

一方『渦』のアルマは初めての子に授乳しない。赤ん坊の誕生に新しい愛情を呼びさまされたハーヴェイはその態度に違和感を覚えるものの、周囲の雰囲気もアルマが授乳しないことを当然と受け止めているようなので、あえて何も言わない(第二部第一章)。アルマが授乳しないのは生活の中心が社交にある多くの上流婦人たちと同じ理由による。彼女たちは人前に出る機会に備えて容姿を美しく保ちたいと考え、医師に非難されても授乳しなかった⁽¹⁵⁾。アマチュア・ヴァイオリニストとして幾度となく聴衆の前に演奏した経験を持ち、機会さえあればプロの音楽家になりたいと考えている女性にとって、形の良い乳房は



図③ エドゥアール・ドゥバ=ボンサン『舞踏会の前に』(1886年)

見せ物としての価値を有しており、授乳によってその見栄えを損なうことは禁物なのである。この場合の乳房は、母性愛の象徴としては価値を認められておらず、男性の視線を意識した女のセクシュアリティの表出手段としてのみ認識されている。

ハーヴェイは、アルマへの求婚に際して「自由を分かち合う」(第一部第十一章)ことを提案し、子どもが生まれた後も「君の人生を僕の人生に従わせる必要はない」(第二部第三章)と、アルマに旧弊な妻の役割を求めない意志を表明する。したがって一児の母になったアルマがプロのヴァイオリニストとしてデビューすることも黙認する。一方アルマは、授乳することを避け美しさを保った身体を活かして男性の協力者を得、初演奏会を終えるが、その緊張や人間関係のもつれから精神を病んでゆく。アルマは後に第二子を得たとき授乳することを強く希望するが、睡眠薬を常用している身体ではそれは許されない。その赤ん坊が突然死に、その後しばらくして、アルマも薬の過剰摂取によって命を落とす。一方、『余計者の女たち』のモニカは、夫の子を宿している時、ビーヴィスと駆け落ちする決意をする。この関係は夫の知るところとなり、モニカはビーヴィスとは別れるが、女兒を出産した直後息絶える⁽¹⁶⁾。

アルマとモニカの運命が示しているのは、セクシュアリティを持たない存在とみなされ、子どもの養育を最優先させるべきであると考えられていた母親が、家庭外に出て女性としてのセクシュアリティを発揮すると、罰せられるということである。

母親になるということは、当然のことながら女性のセクシュアリティが発揮されたことを示すものだが、その表現はなるべく遠回しに、またセクシュアリティを隠蔽された形でなされ、母親のセクシュアリティの発揮としての行為は「母性」に回収される。アルマとモニカは、後期ヴィクトリア時代においても、『渦』のモートン夫人のような「旧式な良妻賢母」（第三部第一章）でなければ生き残れないことを身をもって示している。母親のセクシュアリティは、決して「アナキー」の状態に陥ることは許されないようだ。

第四節 読書する売春婦

ウィリアム・アクトンが主張するところによれば、売春婦について一般的には「ひとたび美德の頂点を踏み外した女性性はきわめて急速に没落し、最後は健康も慎みも世俗の繁栄をも失う」(Action, Prostitution 56) という見方や、「けばけばしく飾り立てて厚化粧した酔っ払いのふしだらな女」(56) という見方があった。アクトンは悪名高い「伝染病予防法」制定に際して中心的役割を果たしたが、一般的に流通していた右のような売春婦観を正す必要を感じていた。彼は、売春婦は「健康体にしても病んでいるにしても概して美人で、物腰も優雅である。泥酔癖も、すでに彼女たちの先輩の代に……やめている」(56) と述べる。また、一度売春婦になったら死ぬまでそのままというこ

とはなく、売春婦から妻への移行は容易であり「売春婦のなかでも比較的恵まれた者は、貴族から馬丁までの、社会のあらゆる階層の男性の正妻になる」(56) としている。このように、売春婦が一般社会と行き来する存在であるからこそ売春婦を検査・管理する「予防法」が必要だと主張したのである。第一節で触れたように、アクトンは、売春婦「自身の制御しがたい性的欲望のせいで女性が道を踏み外すことはほとんどない」(56) と見ており、セクシュアリティの点でも、売春婦になる女が、性欲を持たないとされた他の女たちと違ってはいるわけではないとする。では、女優、婦人帽子屋、店員、家事使用人、工場労働者、農婦たちが売春婦になるわけは何かといえば、それは多くの場合堪え難い貧困だといえる。(56)

ギッシングは若き日に売春婦を救うための金目当てで窃盗を働き、逮捕されて放校処分になる。そして後にはその売春婦と結婚するという形で実際に「救済」しもある。その行動からは、売春婦を貧困を放置する社会の犠牲者とみなし、条件を整えてやりさえすればまともな生活ができるのだと考えていたことが見てとれる。売春婦のひとつの現実とともに生きていたギッシングは、その作品においては売春婦をどのように描いたのだろうか。

『暁の労働者たち』(一八八〇年)で、キャリーの友人ボリー・ヘンプは、人というより獣のようだと描写される。顔立ちが悪いわけではないが、心根が曲がっていて、それが表情に出てい

る。悪意、狡猾さ、欲望やその他、女のうちに巣くうことが想像できるかぎりの情念が潜んでいることを示す目つきをしている。そして身体はまったく健康とは言えない（第三部第八章）。ポリーは、アクトンが否定しようとした、性格的欠陥を持つがゆえに墮落し不健康であるという一般的先入観としてあった売春婦像を典型的に示すものとして描かれている。

『余計者の女たち』にはミス・イードという店員から売春婦になった女が登場する。かつてモニカと服地店で同僚だったミス・イードは、今では「けばけばしい安っぽいドレスを着て、やせこけた頬の赤みはほお紅であることがすぐわかった」（第二十八章）と外見の変化が著しいことが述べられる。店員という職業は、売春婦になった女の元の職業の典型としてアクトンがあげているもののひとつである。ミス・イードは、モニカが結婚のため店を辞めた後、自分も辞めてしまっていた。確かに店員は長時間カウンターの後ろに立ち続けなければならないなど労働条件が悪く、一八七〇年代から新聞や雑誌でその窮境について一般の注意が喚起され始めていた。これを受けて改善に向けた提言がなされ、後には法律も制定されたほどである（図④）。賃金もモニカの例で言えば年給十五ポンドと少ないものだが、しかしそれでどうにか自分一人の生活を成り立たせ、辛抱して勤め続けている娘もいることを考えれば、我慢できなかった者は忍耐が足りなかったとみなされるだろう。この考え方にしたがえば、店員を辞めて売春婦になった娘は苦勞を厭う怠



図④ 「手ずから」『パンチ』（1880年7月24日号）

美しいが情け深いお客「どうぞお座りなさいな。とてもお疲れみたい。私は午後中ずっと馬車でしたから、椅子は必要ありませんわ」

惰な女ということになり、墮ちた原因は貧困ではなく個人的性格に帰せられる。

短篇「ロー・マテリアル」（二八九五年）には、家事使用人から売春婦になる娘が登場する。紹介所からブル夫妻の家に来たメイドのミニーは、使用人あしらいの下手な新米主婦ブル夫人を手玉にとって怠けてばかりいる。家事は全くできず、頻繁に外出して夜更かしし、朝も遅くまで起きてこない。さすがのブル夫人の堪忍袋の緒も切れかかっているとみるや、涙を見せてブル氏に取り入ろうとする。しかし結局、ある晩酒に酔って帰宅したためクビになってしまう。そんなミニーが次に姿を見せるのは、ヴィラズ・ストリート——ヘンリー・メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧困』（二八六二年）で

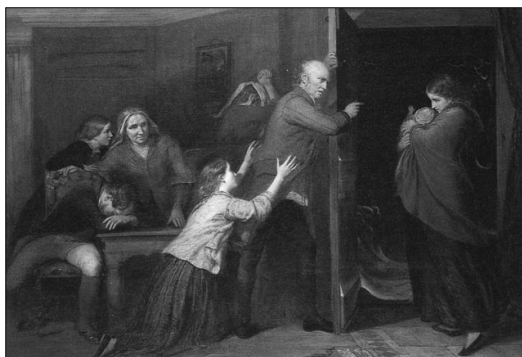
売春婦が客引きをする場所として記録されたハイマーケットにほど近い——で売春婦としてなのである。きちんとした勤め先があつたにもかかわらず、性格が怠惰なため働き続けることができず、売春婦に堕ちてしまった例ということになる。

アクトンは、一度売春婦になっても一生そのままということはない、それは一時的な状態であつて、その後ふつうの結婚をすることがよくあると述べていたが、ギッシングが描くこれらの売春婦になつた女たちは、その後だれとにせよ結婚をしそうにはない。ギッシングが売春婦自身の性格に堕ちる資質があつたように描いているのは、アクトンが否定しようとしたこの時代の先入観を反映しているようにみえるが、より直接的には、ギッシング自身の最初の結婚での経験に基づいていふと考えると良いだろう。売春婦を、不公平な社会の犠牲者とみなして救済しようと考え、結婚までして更生させようとしたものの、妻となつた元売春婦は結局墮落状態から脱することができなかつた。この経験から、売春婦は内在的に堕ちる性質を持つていふとみなさざるをえなかつたのだろう。

しかし一方で、ギッシングの理想の実現に希望を持たせるような売春婦もいる。つまり条件を整えて援助してやりさえすれば、作家の妻にもなる可能性を持つ売春婦である。『三文文士』（二八九一年）では、リアドンが同情と敬意を抱いた美貌の物静かな売春婦が結婚相手としての可能性を考慮される（第二十七章）。この売春婦はリアドンとピツフェンの会話の題材になる

だけで舞台から消え去っているが、『無階級の人々』（一八八四年）のアイダ・スターは思慮深い売春婦として作中大きな役割になる。アイダは、母親が街娼だつたが、そのことは知らずに育つ。十一歳の時に母が亡くなつたため、アイダは食堂の住み込み働き、女中、洗濯婦、と職を転々としたあと、ある家の小間使いとなる。つらい仕事にも耐えていたが、ある日雇用主の言葉に我慢ができなくなり、怒りをあらわにして言い返して勤め先を飛び出す。その家の息子が同情してくれたので愛人になつたものの、結局捨てられ、ついに街に立つのである。この転落の履歴は、境遇に翻弄された哀れな娼婦というヴィクトリア時代のひとつの典型的な売春婦像を示している。初対面でその人相に深い印象を受けたウエイマークは、すばらしい顔つきをしているのに、売春婦という仕事を選んだことによつて今後墮落の跡が刻まれることになるのは残念だと言う。これに對してアイダは、売春婦になつてもそれだけで墮落したとはいえない、他の生き方は選べなかつたのだから輕蔑されるいわれはないと反論する（第十一章）。つまり、売春婦になつたのは、怠惰な性格のためではなく、さまざまな努力をしたあげく、他に道がなくなつた結果であると主張しているのである。そしてその主張が正しいことは、その後のアイダの身の処し方によつて証明される。

アイダは、ウエイマークのもとから姿を消して半年後、売春婦を辞めて再び洗濯婦として働いている。¹⁹⁾その後、ハリエツ



図⑤ リチャード・レッドグレイヴ『追放者』(1851年)

ト・スミイルズの中傷と嘘によって仕事を解雇され、さらに投獄までされるが、そのような試練にも屈しない。出所後は、祖父ウッドストックと暮らし、家庭教師について精力的に勉強する。そして祖父に貧民の暮らしを向上させることに関心を持たせるなど、かつて私生児を産んだ娘を追いつ出した祖父の考え方を変えさせるほどの影響を与える(図⑤)。祖父の死後は遺産を相続し、実際にスラムの住宅改良や女子支援などの慈善事業に取り組む(第三十六章)。とくに、スラムの娘たちが、自分

と同じ惨めな道に進まずにすむようにしてやるために、家庭から引き離し、そっくり他所に移すという計画を立てる。アイダの場合、ミス・イードやミニーのように持つて生まれた怠惰な性格のために売春婦になったわけではなく、もっぱら外的な不可抗力が原因とされており、機会さえ与えられればいつでもすぐ辞めて、きちんとした生活に戻ることができる人物として描かれている。物語の結末で、ウェイマークとの結婚が暗示されているが、これは、アクトンが、売春婦から妻への移行は容易であると述べたことを例示しているようにみえる。

アイダは、ヴィクトリア時代の売春婦についての先入観を覆すと同時に、新しい売春婦の姿をも示している。彼女は街娼をしながらも本を読むのである(第十一章)。初対面の時たまたまウェイマークが持っていた本を借り、さらに貸してくれるよう頼む。アイダは学校時代には教師になりたいと考えていたくらいなので、もともと知的好奇心はあったのだが、知的な男性と対等に会話ができるというのは当時の街娼の属性にあるとは考えられないものだっただろう。ウェイマークにとってアイダは「自分と対等な存在になる人格の力がある」(第十四章)と思われるほどの人物である。すでにモードという十分知的な女性と親しくなっていたにもかかわらず、アイダはウェイマークの理想の女性となる。「君の知識は彼女たち〔他の十九歳のまだ学校に行っている娘たち〕の無知よりも素晴らしいと思うよ。僕の理想の女性性、人生の最悪の秘密を知りながら、清らかな

心を持っている人だ——君みたいにね」(第十七章)。このようにアイダは知的であることによってウエイマークを喜ばせるが、そもそも出会ったときから売春婦であることがわかっていくからには、何よりも性的な存在であり、「官能的情熱」(第二十一章)の対象であつて、そのことはウエイマークにとつて大きな価値を持っていたことだろう。この作品は、性的に解放された女性が、同時に男性に尊敬されるような頭脳も持ちうることを示した点でも画期的だった。

ギッシングは知的に自分と対等な女性を求めながら、そのような女性は自分の手には届かぬ存在であると考え、また性的な満足を得る必要に迫られて結婚し、その結果最初の結婚は身内や友人にも紹介できない相手との結婚となった。また二度目の結婚時には、「ハリソン夫人に手紙を書いて、結婚したこと、これ以降は教養ある人たちとは付き合えないことを知らせた」(Diary 244) ように、妻の知性の欠如を恥じていた。女性が性欲を持たないとされてきた時代、またミドル・クラスの夫婦の性が生殖のための性に限定されていた時代に、執筆の不調を性行為によってまぎらわそうとしたギッシングを受け入れ、しかも知的にも対等な女性は、当時の規範からすれば「性のアナキー」を体現する存在となつただろう。それこそがギッシングの理想の女性であり、アイダはその理想を託された人物だったのである。

* * * *

ギッシングは「性のアナキー」の状態を、男女が理想的な関係を築くために通過しなければならない状態として想定した。女性の生殖能力を低下させるとして反対された女性への教育を勧め、男性の性欲が厄介なものであることをさらけ出す。また女性には性欲がないという先入観に異を唱え、売春婦を理想の女性像として提示する。しかし一方では、母親のセクシュアリティが規範から逸脱することは認めず、従来型の良妻賢母を「旧式」としながらも肯定している。新旧の価値観が入り乱れ論争が闘わされていた時代を背景に、相反する欲望に引き裂かれたギッシングのセクシュアリティ観自体もアナキーなのだったと言えるだろう。

註

- (1) Elaine Showalter, *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle* (Harmondsworth: Penguin, 1990) 3.
- (2) Herbert Spencer, *The Principles of Biology*, 2 vols. (1867, New York: Appleton, 1882) 2: 485.
- (3) Henry Maudsley, "Sex in Mind and in Education," *Fortnightly Review* 21 (1874): 468. なおこの論文はハーヴァード大学医学部教授エドワード・クラークの「教育における性」(一八七三年)に依拠している。
- (4) John Stuart Mill, *The Subjection of Women* (1869; New York:

- Appleton, 1870) 38.
- (5) A Lady Graduate, "Presentation Day at London University" in *The Girl's Own Paper*, vol. 19 (23 July 1898) 677.
- (6) Margaret Bryant, *The Unexpected Revolution: A Study in the History of the Education of Women and Girls in the Nineteenth Century* (London: University of London, Institute of Education, 1979) 88.
- (7) イライザ・オームとクレアラ・コレットにひらびは「本書序章の註(37)を参照せよ」。
- (8) William Acton, *Functions and Disorders of the Reproductive Organs in Childhood, Youth, Adult Age, and Advanced Life: Considered in Their Physiological, Social, and Moral Relations* (1857; Philadelphia: Lindsay and Blakiston, 1875) 162.
- (9) William Acton, *Prostitution*, ed. Peter Fryer (1857; London: MacGibbon, 1968) 127.
- (10) 労働者階級では妊娠するまで結婚しないという習慣もあったため、婚前交渉が行なわれることがあったが、ミドル・クラスの規範からすると、それは性的モラルの欠如とみなされただろう。Joan Perkin, *Victorian Women* (London: John Murray, 1993) 59-61.
- (11) Havelock Ellis, "The Sexual Impulse in Women," *Studies in the Psychology of Sex*, vol. 3 (1903; Philadelphia: Davis, 1908) 179.
- (12) Lionel A. Weatherly, "Breast-feeding: An Absolute Duty" (1882) in *Women from Birth to Death: The Female Life Cycle in Britain 1830-1914*, ed. Pat Jalland and John Hooper (Atlantic Highlands, NJ: Humanities, 1986) 206-08.
- (13) Edmund Cautley, *The Natural and Artificial Methods of Feeding Infants and Young Children* (London: J. & A. Churchill, 1897) 11-12.
- (14) Havelock Ellis, *Studies in the Psychology of Sex: Sexual Selection in Man* (1904; Philadelphia: F. A. Davis, 1906) 27.
- (15) 医師シヤウマスは「社交は、時としてまたの名を自殺、そして乳児殺しと言ふ」と書き、社交を理由に授乳しない母親に子殺しの罪を負わせる。Pye Henry Chavasse, *Advice to a Wife on the Management of Her Own Health and on the Treatment of Some of the Complaints Incidental to Pregnancy, Labour, and Suckling with an Introductory Chapter Especially Addressed to a Young Wife* (1839; London: Churchill, 1875) 7. また、乳母雇用反対の先鋒であった医師ラウスは「(授乳と)義務がいつとき楽しみの妨げになるからと云つて……それを他人に任せるような者がいる」と非難している。C. H. F. Routh, *Infant Feeding and Its Influence on Life or the Causes and Prevention of Infant Mortality* (1860; New York: Wood, 1879) 58.
- (16) モニカの子は、母亡き後、モニカの姉が育て、ローダが後見人となる。ローダもモニカの姉も未婚であるため、セクシュアリティを持たない母親を文字通り体現することになる。
- (17) たとえば、一八七八年十一月九日付「タイムズ」の投書欄には、常日ごろ「立ちっぱなし、食事時間不足による早食い、休養不十分などが原因となった健康被害に苦しむ服地店の店員たちを診察している医師からの投書が掲載されている。『ランセット』は一八八〇年五月八日号に「女性への虐待」と題する論説を掲載して、店員が立ちっぱなしになることを防ぐための運動を始めた('Cruelty to Women,' *Lancet* [8 May 1880] 729)。また、フェミニス

ト雑誌『イングリッシュ・ウーマンズ・レビュー』一八八〇年七月号では、店員用の軽便椅子が提案されている。店員の労働問題は議会でも取り上げられ、一八八六年に労働時間を規制する商店法 (Shop Hours Act)、一八九九年には店員三人につき椅子を一脚カウンター内に用意することを定めた法律 (Seats for Shop Assistants Act) が制定されるなど、店員を保護する法律が次々と制定あるいは修正されていった。店員の労働環境をめぐる問題にこそ Lee Holcombe, *Victorian Ladies at Work: Middle-Class Working Women in England and Wales, 1850-1914* (Newton Abbot, Devon: David and Charles, 1973) 第五章に詳し。

(18) 店員の賃金の低さがどの程度であったかを推測するために他の職業の賃金と比較してみると、たとえばパーラーメイドは一八八八年 (作中、モニカが店員をしていた年) の『タイムズ』紙の求人広告で年給十八ポンドから二十ポンドを提示されている。またバメラ・ホーンによれば、一八九〇年代のロンドンの下働き女中 (平均年齢十九歳) の平均給与は年十三・七ポンド、同じくロンドンの台所女中 (平均年齢二十歳) は十六・六ポンドだった。Pamela Horn, *The Rise and Fall of the Victorian Servant* (Dublin: Gill and Macmillan, 1975) 131.

(19) 洗濯の仕事は、罪を洗い流す象徴的な意味合いをもった仕事として、売春婦の矯正施設で奨励されていた。Judith R. Walkowitz, *Prostitution and Victorian Society: Women, Class and the State* (Cambridge: Cambridge UP, 1980) 221.